

戦後77年が経ち、その実体験を語ることのできる人も年々少なくなっています。現代に生きる私たちが、戦時下を生きた人々から学び、そしてその学んだこと、感じたことを、次の世代につなげていくことが大切だと思います。

松森久志さんが体験した戦争

昭和19年、近衛兵として皇居を守備するため、東京に行くことになりました。誇らしさと共に、従軍することへの怖さもありましたが、近衛兵に選抜されたこ



久志さん(左)と息子の薫さん

とで地元である白山町家城の人たちや、何より父親が非常に喜んでくれたことをよく覚えています。

従軍中には、死に直面したことが何度かありました。赤坂で起きた暴動の鎮圧に向かったとき、米軍機の急降下爆撃を浴びました。自隊の上官が「退避！」と命じてくれたためなんとか助かりましたが、合流していた友軍の部隊は「早駆け！」と命じられて進軍し、爆弾を受けてほぼ全滅してしまいました。

東京大空襲の時は皇居周辺にも多くの焼夷弾が降り注ぎ、翌日には不発弾の処理を命じられました。さすがにそれは…と躊躇ちゆうちよしていると、隣にいた同期の上等兵が「自分が行きます」と名乗り出て、不発弾を抱えて防火水槽に飛び込みましたが、その瞬間爆発して亡くなってしまいました。同期が自分の身代わりになったのでは…と何とも言えない気持ちになりました。

この時代はどのようなことであっても、上官から出た命令に対して「できません」「嫌です」ということは言えませんでした。どうしてもできないことは黙っているしかなかったのです。

昭和20年8月15日に戦争は終わりましたが、GHQによる戦後処理が始まり、「いつ自分が呼ばれるか」と生きた心地がしま



とことめの里一志での講演(平成27年2月)

せませんでした。8月15日未明の「宮城事件きやうじやう」に、事情がよく分からないまま命令を受け、関わってしまったからです。9月になって帰郷命令が出て、ようやく「戦争が終わった」という実感が持てました。

戦後は、まず何よりも「自分の身代わりにさせてしまった」と思っていた同期の上等兵のお墓参りのために九州へ行きました。お母さんと面会することができ、その時の状況を伝え、わびたのですが、「近衛兵として、名誉の戦死を遂げた息子が誇らしい」と言われました。75年も前のことですが、この時の様子は鮮明に覚えています。今となってはそのお母さんの本当の思いを知るすべはありません。

帰郷や戦友の墓参りの際に東京をはじめさまざまな街を見ましたが、大きな都市はどこも焼け野原になっていました。情報が統制されていて、全国的にここまで被害を受けていたとは思っていませんでした。

戦時下を生きた世代として、次の世代へ伝えたいことがあります。

戦争はどんな理由があっても結局は命の奪い合いです。意見が分かれることもありますが、戦争という手段を取ることは絶対に避けなければなりません。また、あの時代は自分も含めた多くの人々は思っ



白山中学校での講演(平成29年10月)

ていることを口にすることができませんでした。今はほとんど何でも言える社会になってきていますが、だからこそよく考えてものを言わなければならないと思っています。

長い間土地に関する仕事をしてきました。昔は「貴重な水をみんなで分け合う、そのためにどうしたらいいか」という方向で話ができたのですが、いつからか自分の利益だけものを言う人が増えてきたと感じています。人間は時に相手の言葉や言い方によってぶつかり合うこともあります。その際に自分の主張ばかりではなく相手の言葉にも耳を傾け、歩み寄っていく姿勢が必要です。そのような姿勢が個人においては争いを遠ざけ、国家間においては戦争を回避していくことにつながる、と私は思っています。

※終戦を国民に告げる「玉音放送」を巡って近衛師団司令部で起こった争い